



第18回日本創傷外科学会総会・学術集会

会期：2026年7月9日(木)～7月10日(金)

会場：アクトシティ浜松 コンgressセンター

会長：鳥山 和宏 先生(名古屋市立大学 形成外科 教授)

ランチョンセミナー6

Enzymatic Debridementの 可能性を考える

日時

2026年 **7月10日** (金) 12:30-13:30

会場

第**2**会場(アクトシティ浜松 コンgressセンター)

司会

森本 尚樹 先生

京都大学大学院医学研究科 形成外科学 教授

酵素的デブリードマン製剤「ネキソブリッド®」
日本版コンセンサスドキュメントを読み解く

演者

松村 一 先生

東京医科大学 形成外科学分野 主任教授

壊死組織除去剤ネキソブリッド®使用後の熱傷創面の変化
—特にわかりにくいⅡ度熱傷を中心に—

演者

森田 尚樹 先生

地方独立行政法人東京都立病院機構 東京都立広尾病院 形成外科 部長

Enzymatic Debridementの 可能性を考える



酵素的デブリードマン製剤「ネキソブリッド®」 日本版コンセンサスドキュメントを読み解く

松村 一 先生 (東京医科大学 形成外科学分野 主任教授)

2022年に本邦で承認された酵素的デブリードマン製剤「ネキソブリッド®」(以下NXB)は、熱傷治療における新たな選択肢として普及が進んでいる。しかし、本剤は単に塗布するだけで十分な効果が得られるものではなく、その真価を発揮させるには、適切な症例選択と手技に対する深い理解が不可欠である。

特にNXBは、コラーゲンの熱変性で生じたゼラチンを酵素反応によって分解・除去する機序を持つ。そのため、いかにして「酵素反応が進行しやすい至適環境」を構築するかという視点が、治療成績を最大化する鍵となる。こうした観点を含んで日本の臨床環境に即した、日本版コンセンサスドキュメントを策定した。

熱傷治療およびNXBの臨床経験が豊富な専門医7名(形成外科医4名、救急医3名)をパネルとし、デルファイ法を用いたアンケート調査を実施した。「適応」「疼痛管理」「適用タイミング」

「使用テクニック」「適用後の創管理」「植皮」「癒痕」の7分野・計27項目のステートメントを作成し、80%以上の合意を基準として採否を検討した。

この結果、全27項目のうち21項目(合意率77.8%)においてコンセンサスが得られた。

本発表では、これら各ステートメントを解説するとともに、実症例を提示しながら臨床における具体的な使用方法について詳述する。

本コンセンサスドキュメントは、国内外のエビデンスと国内専門医の知見を統合した指針である。本剤の適切な使用法を普及させることで、本邦における熱傷治療のさらなる質向上に寄与することが期待される。

壊死組織除去剤ネキソブリッド®使用後の熱傷創面の変化 —特にわかりにくいⅡ度熱傷を中心に—

森田 尚樹 先生 (地方独立行政法人東京都立病院機構 東京都立広尾病院 形成外科 部長)

ネキソブリッド®は熱傷創面に対する酵素的デブリードマン製剤として本邦では2023年8月に発売、現在では多くの施設で使用されている。この製剤の使用に際しては従来ヨーロッパコンセンサス等を参考にしていたが、本邦での使用症例数が増えるに従い、本邦独自のコンセンサスの必要性が言われるようになり、本年3月に日本版コンセンサスが発表され、本邦でのネキソブリッド®使用に関する重要な指針となることが期待されている。

しかし熱傷創面の評価は日本版コンセンサスの17項目目「ネキソブリッド®適用後の色調や出血パターンから熱傷深度を判定できる」が不都合となり、ある程度の経験が必要であることが記載された。

ネキソブリッド®使用後の熱傷創面の変化はEuropean consensus Guidelines(2017, 2020)と米国のVericel社のHPに掲載されている所見が代表的な分類として知られ、ほかにもい

くつかの報告を認める。これらの報告ではDBでは大きな違いは認めないが、DDBでの創面評価はそれぞれやや異なり、実際に使用すると判断に苦慮する症例も少なくない。これはpost soaking時の色調や出血パターンが一樣ではないこと、この製剤使用後に生じる独特の変化、Pseudo escharがescharと混同されることによりその後の治療方針決定の判断に苦慮する等にあると思われる。しかしこの製剤の壊死組織除去効果はその後の治療経過や治癒後の癒痕に大きく影響する可能性が高く、一般に治療経過によっては醜形を残す可能性の高いDDB症例に対して、ますます重要な治療方法の選択肢となることは否定できない。

このセミナーでは主にDDB症例に対するネキソブリッド®使用後の熱傷創面の変化とそれに対する治療方針の決定、保存的治療であれば上皮化後の癒痕の状態を当院で経験した症例をもとに解説する。